

# 春のゆくへ

土田龍太郎

去年いにし春、さながら契りおけるがごとくふたたびめぐり来るは、言ふもおろかにて今さらいぶかしむ人としてあるまじけれども、この天地のたへなることわり、まことは人の思ひ測りのほかに出でたり。さればくすしあやしとばかり言ひてぞやみぬべき。

契りあれやまつに櫻の花の春

花さそふ嵐に晴るる霞かな

咲く花に霞のうすくわたりて、さかりの色の見えみ見えずみ定めなく、ややもせば隠れがちなるさまのめでたさいはむかたなし。これげに若きをみなな櫻色にほへる肌へにただ白き一重衣ばかりうちかけてなまめき立てる姿にもやたとへてむかし。

春霞たつや花色うす衣

色とほす霞ぞ花のうす衣

風になびく霞に花の見えがくれ

如月の半ばをも待たで夜べの嵐に都の花とく散りはてぬれど、あかざりし春のなごりのなほ尋めまほしければ、すずろにさすらへありくに、いづことも知れぬ山里めきたるところにおほえずまどひ入けるなるべし。ふもと近きあたりこそ花はやおほかたうつろひぬらめ、さかしき道を上り行けば、さすがに散らで残れる櫻の枝深く分け入るにしたがひていとど数そうて見ゆれば、やうやく離りゆく春の別れ路をさながらたどりゆかむ心地さへして、おもしろきことたとふるにもなし。

暮れてゆく春の宿りかおそ櫻

ゆきがてにやすらふ春やおそ櫻

木の間よりながめやる遠山ののをへ、雪まだ消えやらで今ぞ霞そむると見ゆれば、これなむ去りゆく春のつひの住かともやなりぬべき。

おほかたの春のゆくへや嶺のはて

散るまでは去りあへぬ花の木かげかな

深山に散りのこれる花こよなくうつくしければしばし去りがてにすれども、日かげうつろひてやや暮れがたになるままにしひてもと來し道を急ぎ下るに、ここかしこ繁れる若葉のひまよりもなほほの見ゆる残りの花。里にもどりゆくわがためのよきしるべともやなりなむ。

かへるさも花をしるべの山路かな

(平成三十年五月十七日受附)